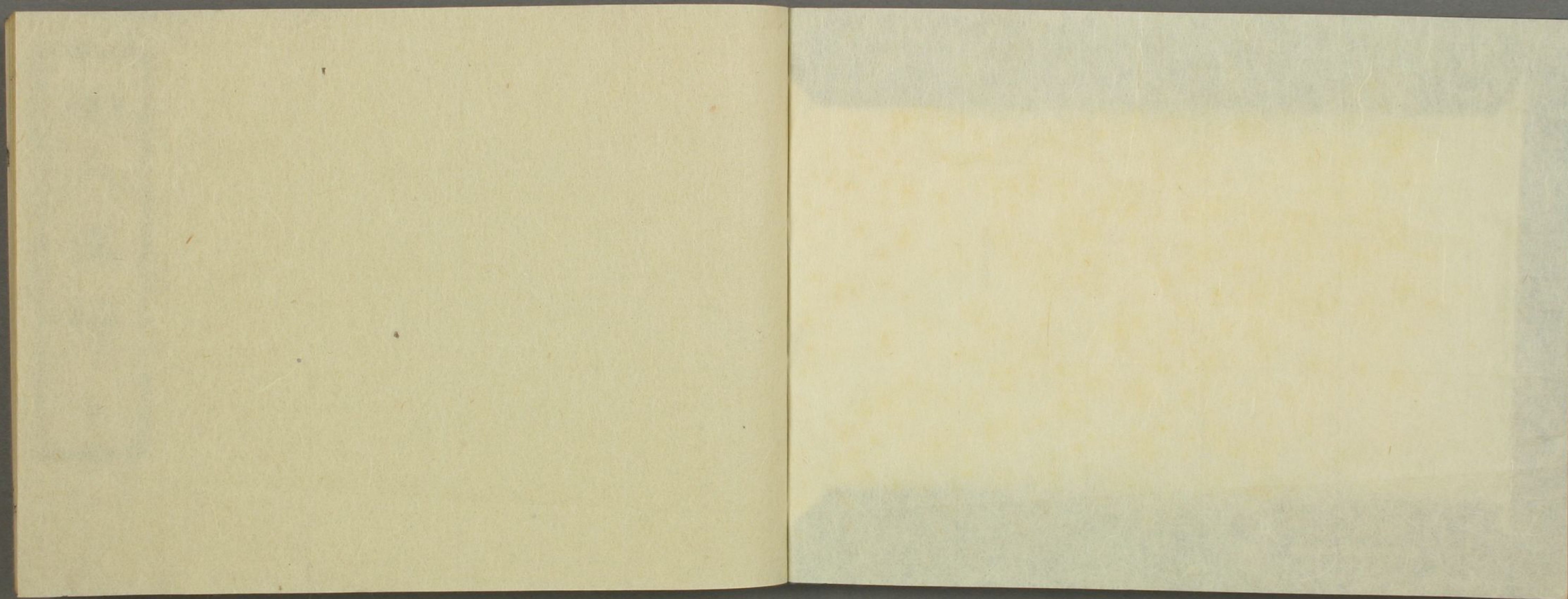




中村俊定文庫
文庫 18
88





四人法師

全

延寶六年二月中旬



菊二百韻

ひひつが丸郎や片萩菊能梅翁
 むつよの目よいかははきしんを 兼翁
 旧縁とたのそれ唐やあふん 曰
 うきよなるゆめあまかのま梅
 夜あま何氣もあぬ月落て日
 昼はくや地が露れまら玉露
 秋虫も従後の志うぞかり之曰
 秋面上は雪ふ乃夕夕をれ梅

はびりきふあぬのかよきとて曰
不意よ松うく風のよとて建藤
一筆れまはやく建てたる友古曰
えやいひひまあぬるよ云梅
あまはあぶさう計わぬ梅曰
うろく入て入ル恋乃と然云藤
我せこい三千人と安えけり曰
玄宗乃代のはかよのむを梅
むけものいえ和れ秋の来るよ曰
ひりくこれ月ぞあけゆく藤
まうそこの礎れ礎の敷添て曰
ふ照のともし千とびうの夢梅
いせ語やのまいとが花盛曰
庵んさう一荷あお布かりむと藤

酒塩のそち来さのやうむん梅
南蠻流の酒ちのこま少藤藤
あそぐあおとめぐと入日朝梅
火よりいけしも紅葉あがる藤
席の敷えととちやくとらあひ梅
あつこあでひりああき風藤
かまやちあひなとよわとち梅
形たのわあぎゆとまのちり藤
花を舟のえとば屋は付込て梅
なんぞぬまて取てをえ藤
かつとあひやくとらも藤藤梅
ひりり一和をわすきさ藤藤
あまうんまもわくわも藤藤梅
志らひあうれ屋戸をむん藤

葉の蔭の阿^アドもねて死なれ^ル梅
顔^顔倒す^倒でよ^よも^もさ^さん^んは^はら^らり^り梅
天^天る^るう^うち^ちま^まい^い通^通う^うら^らる^る六^六梅
あ^あら^らじ^じた^たら^らの^の神^神も^も照^照鏡^鏡梅
悪^悪い^いあ^あづ^づが^がの^のあ^あま^まえ^えを^を歎^歎梅
く^くお^おの^の八^八千^千世^世よ^よう^うら^らる^るを^を梅
塩^塩乃^乃ら^らし^しけ^けあ^あの^のち^ちあ^あら^らん^ん梅
わ^わら^られ^れば^ばこ^こう^うあ^あま^まに^にな^なお^お梅
せん^{せん}ど^ど葉^葉よ^よま^まあ^あの^の浪^浪と^とえ^えあ^あ梅
頸^頸痛^痛よ^よく^くら^らら^らぬ^ぬの^のれ^れ々^々月^月梅
あ^あら^らじ^じれ^れん^ん子^子世^世よ^よあ^あら^らる^る梅
わ^わら^らり^り唇^唇の^の門^門出^出に^に梅
引^引て^て来^来る^る花^花あ^あき^き里^里れ^れお^お梅
柳^柳を^を足^足ど^どり^り米^米を^を白^白米^米梅

あ^あら^らじ^じの^のあ^あの^のち^ち乃^乃日^日で^で梅
尸^尸せ^せし^し名^名の^のこ^こら^ら如^如上^上人^人梅
は^はま^ま向^向の^のひ^ひと^とは^はゆ^ゆ後^後集^集連^連梅
わ^わら^らり^りに^に身^身を^を吹^吹風^風乃^乃梅
そ^そら^らく^くと^と舞^舞立^立る^る猿^猿は^は葉^葉梅
あ^あら^らじ^じ尾^尾上^上れ^れ子^子と^とち^ちい^いり^り梅
松^松乃^乃精^精う^うを^をあ^あら^らじ^じ珠^珠数^数珠^珠梅
風^風一^一劫^劫乃^乃殊^殊も^も題^題目^目梅
打^打ち^ちす^すら^ら鼓^鼓の^の浪^浪よ^よ文^文字^字足^足で^で梅
金^金文^文銀^銀強^強ク^クを^をど^どり^りなり^{なり}梅
取^取り^りて^てさ^さら^らこの^{この}灯^灯籠^籠あ^あら^らじ^じ梅
枚^枚丸^丸た^たら^らし^しも^も月^月乃^乃面^面け^け梅
我^我ら^らの^の煤^煤の^の色^色よ^よあ^あら^らじ^じ梅
表^表具^具よ^よ付^付ら^らし^し物^物た^たぬ^ぬく^く梅

梅り香ハ捨ても百葉とハ又岸
千以吳見も今ハ何とハ梅
小年此名ハ梅りても小松友岸
梅乃乃酒宴権苑一日梅
月さひハ心下君此ハ冬岸
か志う并にすぐる唱聲梅
妻衣乃依吹送可然風岸
梅立梅少りて何毎ゆき梅
觸状を私の歌えとらん梅
友日乃内所使以也り梅
身もやを觀世今去何ハ実岸
云義ハ何といお生此松梅
同ハ分夜と何ぐる大土意ハ
客ハ何五のぬえんの友岸

飛まらるあげ座此胡蝶と
もらあして足さる一睡の友岸
中さ此はめが乃るまに梅
まをせあわらひ猿さけぬハ岸
せり人乃を所習れぬとハ梅
ひよいとむせさるハ梅たま岸
奇念仏杖を執り押直して梅
梅乃乃不雪のそ兒ハ何り岸
友たをととめてれ々ハ慈心梅
洞乃川の淵が替ッハ冬岸
あぬお則と今つ多る梅
是を一掃乃冬ハ梅りた岸
梅の前は月さハおてゆ梅ハ
琵琶琴もをせて燕の上凡岸

菊のちがひなきをよみしは
二尺五寸ハスルリ及ぶ日
ひとまはけあらしむる
そとにさうよ字流の墨人日
川鯉細よりとんざりぬ
流るるありあひ地言や日
波よ花言もとあひあり
小うまづきして梅ちる日

宗同五十句

江雲五十句

因

奈良坂や令對室生二面
三年に一交休すこひを
梅の香よ苗あけ風あて
去やむうこれぬ流れ上
勝月あつたかこいに入
何て何所ぞうしにた
すめとて鞍馬も何ん日
人間翁事不自由翁

法衣去物よりくち六十も介梅
新式一冊もりてひらひて梅
賣魚此物此物又語ゆり梅
歌文傳よきとせ行ひ一梅
律代乃事位よみ存あり六梅
西もくくもや物念此歌梅
豆腐くくもやす物とれ金梅
不業乃歌よわもをふる梅
神代形む申さるお余はは梅
十萬信土くもい信乃歌梅
信乃小死んでれお物成梅
吾分おむら小男席此歌梅
年むらりよりて花やう紅梅
これ浦嶋れどんをゆるり梅

糸らんけりる車りらひの約梅曰
すてよ宣言やんを海づる梅
えあれ松楓枝とくはるる梅
りあこと我と病いふ年一梅
起信文とらやのふとく梅
白川枝を符ぬ取梅
文紙よふ袖よれえやう梅
吳尺ハそち乃揚子屏風を梅
所りそハ浪津のやどのあ梅
何とわりとぞ大釜乃梅
築此業とあつた梅
かから菴れもま梅
鮫桶のちれぬ梅
つあ山梅乃歌乃せの中梅

唐室いんえくぬり其時
それぐし氣分谷川乃あり梅
香も寂寂とれがもの勝出で岸
あ茶汁でもあり小三かゝい梅
葉のり野鳥の沙田り二分岸
大地とあんで片も終つて梅
くすすぬくよ海か思慮の岸
ひてくくぐいなき油糟梅
菊島家と去るをくべ岸
今やせ見えく月の下蔭梅
もん不亦くくくくく夜岸
紙子れ外をあらひもい梅
祇式を清多坂の花をり岸
大同二年れ去乃去き梅

千代震比の生れ未聞と曰
はよまよしやわくくくく岸
見わさせは静か思慮の物かけ梅
前坂とえむる清多一人岸
釣針とえむくくくく岸
村よりやくく矢尻両ふ岸
故つ乃那波へのあまもく岸
石いこれても飛んたう岸
兼儀ありはあまも岸
前れあまよおとく岸
虎乃威も静か思慮の梅
むもよ岸も小芝居の依岸
水菜屋よ月とくくく岸
十七八がわくかをやく岸

日れけんさといひやも神家梅
わろくろくさしるやにけきし梅
小つごいれもよあやわらむ風梅
彼判官乃定れあけがの岸
初音にかもらふはつらんと梅
朋より肝きまのあしむい 筆岸
とす切まぢりといやも志焚た梅
小ごりに先すぬずれは説々岸
陰浪の名をささつとささり梅
月ともしくこり五湖の魚魚岸
くまやぶらてぬ梅岸の交梅
平家の使者かゝの場の之岸
こくすの山太刀より花たり梅
祿興と布敷のまねく梅岸

三千坊はつとれして油屋曰
お軍さやことあけがされ梅
えごご宿まをい住勢流の山遊岸
七八九十する子と後をて梅
菅笠よいろはにほとり岸
村でのお知り子苗とらえ梅
惣堂よ本さるうけとあが岸
あましも作れ右橋よて梅
雙鏡のあがれとさく老燈初岸
とくせえりしとさく乃未梅
ちよふよひあがらなまあけて岸
七尺ゆこの今生ね生梅
つとて残さげれちとえんよる岸
月日しうけよ神の下り梅

わが心は空を穿てて雲を
きんちやくま入りはじけ
梅 松は花とおそろし
出すまひは岸
をさうせしや久魚乃花梅
い川の石にきき人のたも
秋岸 十年こちこち
松の志く雲梅
な口で一尺ちりり
岸花梅岸 春宵
子念落れの人梅

江雲五十句

宗因五十句

塙
元順独吟

長崎高橋氏四郎長清尉茂尉の
ゆゑハ 大樹公乃清秋と象
里見の唐舟れ入さかきとも極
清心乃海おらやうなる人も
去年の秋乃は彼津よまらり
ての書なまむはひゆり
おら乃秋も厚薄らん
おは必中契りゆり
はらふるみそえりも
おそむらぎら
秋乃上葉
風志はる菊は花ぬさつ
川ひらくは舟本氏茂久
ゆりれみ

とそ子お落し紙入れの歳時
雅文日記なやま行ひし葉月
六日お世とらせ給ふすそ
もや計給ふゆきぬ年が成とら
わきて面ごそ那くおとそひ
友のまはきくおやまぬ人も浅
しとやいつくはみきんはあ
もそ一れき紫と津ぬ白
葉乃落中つきしとら
竹りぬ

元順

状物をあき風り死去れり
何月幾日何時乃落
萩落花あつしきうけよ入て
あそちぬおとくをまそれせん
あつちよよあしして二間床
白きあつし毛織ちりめん
村河ぬちあゆむよあ用念
旅へつきてあ氣きん下よあ法

うはく〜こらんを乃せけりるれ上
 かん又いさなを現懸れ〜らを
 割美やけ〜と〜あ松乃凡
 差を破き〜又中〜事
 判形乃も〜逢も何〜事
 志乃ゆや利体を利乃筒
 お〜あも〜記多為れ智もそ
 びんぐ〜んせハ花乃〜こ〜
 表なきや又あなれや何や〜
 付白び〜〜厚〜心
 元乃又表膏葉よ〜曉て
 銅鐺〜〜入〜〜月
 弁齒も我乃〜〜れ秋〜
 た〜れ芝居や〜〜乃宿

ぬやめハ又大風と日まぜあ〜
 毛〜も瘡を新玉乃わ〜
 分〜て入るや〜る〜
 指〜〜〜誰〜〜
 栄人れ〜〜〜永りあ
 ころり〜〜昼度あ〜〜
 脈ハま〜〜何〜あ〜水
 な〜〜〜片〜あ〜茶碗片〜
 偽ハ硯乃墨〜〜
 ま〜〜〜よ〜な〜も〜盗人れ〜
 右末乃松ふ不き〜と〜酒
 汝歌尺〜〜けてあ〜〜
 夕嵐月吹送〜〜〜
 めえても影乃〜〜〜
 火

世乃秋^併紙棚の大黒^土ちり終へ
流^りく^るバ^も病^もや^りて^白板
そ^くの^ひは^菊乃^下名^押ま^て
南^乃海^代さ^かん^乃の^進法^婦
是^將も^紀乃^玉風^やぬ^る見
日^よく^糸も^おも^ぬ屋^の乃
一^本乃^伽羅^も大^くく^焼き^お
こ^まツ^く乃^神鳴^ぶく^ひ
都^中よ^そろ^はひ^くす^すく^比
う^どん^をむ^さり^おこ^され^おり
月^涼一^酒あり^所も^六二三^盃
ゆ^き道^奇を^風お^りを^て
花^ゆ乃^が舞^妓ぬ^るい^くま^り
皆^乃く^くひ^もと^七よ^おく^も

氷^とく^せの^きや^うを^支張^お
わ^くく^りや^袖い^るく^こに
さ^ひ夜^のわ^らぬ^まし^念う^れ
鯛^よま^らく^く一^煮り^動當
膳^初ふ^も紙^冊の^舟橋^名に^お
中^陰う^かく^く一^月毎^乃比
独^吹乃^わら^ぬ葉^や志^げら^ん
か^くく^れう^くひ^くづ^く乃^毒
下^よく^く盃^ひえ^その^月
先^後合^あの^咲乃^月
氣^短よ^く一^語を^扇で
大^殿様^{より}は^なる^乃秋
小^田に^来は^えわ^くく^乃
畧^色乃^松も^そん^がく^物

塩目なるうらや位の江よつたふら
 明神あつたれ吳見あつた
 ケ除書けをがごとくに差えて
 める件乃乃曉け 後
 かつとさあけいもの口くせふ
 こつ昼乃やうなふらうめ
 善をとめ一袖思ふ教ひつとや
 うさせうらひハ隠をが秘密
 供乃者もどれと云て思ふ
 桃灯毎用月をわらわ
 せつくとまの心乃身晴く
 病乃命もさなが進ひぞ
 花ぞちるか乃くうや思ふ家
 廣死天下り一と乃梅

東風ふくを伝きつれも
 御身名取あおろく
 呉竹乃あつた乃付扇ケ
 啞喉れ是恨心去れ老
 孝のやそことひくあと去まふ
 三味線やう海一海の白糸
 思傳ひ親にうあつが念馬う
 上たあけとく毒乃下處
 ぬせくもま紫乃煙揚ほり
 々小精を日に生魚乃りさ
 妹と肯乃申も紫音や登らん
 物知りうそや恋乃さぬらげ
 西ぶよ六月とやとそこのびふ
 雙よととく向あ乃乃々

先祖より極てゆげは乃菜
あごまたせ下のまわ痔のりま
老取うけぬり川てかこ親
客ふか多るる寝るものひ移よ
あつひま候あつひま踏を枕よそ
まらも志つぬもふ合乃舟
使宜せよ侍隨の比玉の花盤
そきぬ方ち二百里れ去

大坂宗岡作舟三と

は一歩を足まは流り
鑽佛系乃因持法浄
乃縁ともなごうちうご
ぬんそを必うけよる

こひゆふ庵一ぬも一と
せ彼地りりくを一雨
は人乃つきぬらまひん
ま一はか一を阿さう
を付又舟が氏志
さゆらるせう川ハカ筋
なまふまふくく川ハ
縁とむまぬもやとと
一まの使によまらぬらじ

梅新

是や去年れ後地語とほお何
百款をそくり夕暮乃去
はら酒といひあぬは花教て

京
江雲獨吟

賊猿何

藤翁

歌
たたりこすけりしそへ飛鳥風
瀧ハ激よまをむむお葉を此月
川ありも一息次その原啼て
時付乃状かきて来津ん
折所のうつ建ハかりお場お
右ささ都よこるを等川集
式里にたううう信て中る
竹平あつふよのつと竹へ
非

冬陣作 一乃木戸と廻ひ後乃末
ら建作 寺中妙作 徳止那の化力と
力作 鳳家とあまのうら
笠作 唐人の衣う流也故作
乃乃旅少く秋乃初風
一皮志作 心底い之志事ぬ花の香に匂ひ
以也よひぐむむむれく作

表の面をなまあはのうこ美見
ひるのハ妙と雪乃心の端
尺かよはる趣後れ玉境
旗作 木の丸飯れ伊用木也
入札ハ山附鳥落久作
およのり乃村飯乃穴
爪と待末れ墨人ねち上戸
ぬ作 いきとけ家毛む作
秋の終のまに作 俊成定家ぬさ作

廿四 伊
廿六
世のつて五百費のふれ
昔知り乃三舟の古
狂女さかまにのり子の切
公妻アウの是こすして
去乃一世一友乃大酒
夫婦のさうひ二まよま
は建あさの積くして書よ
外とけとけよ加減因諾
乃のまにのりもの夕目
皆他乃世上の人乃偽
阿きくうにさあ鏡月
餅さこめかられよ
業平を狂えめて花
令魚も妻乃水くく

一挺の油煙のかまを流りめ
あまや遠里小町の道
ひまはく時代遠ひの
らく目くさいて虫え
同類ハ文て傾く月乃
古き趣向と須磨の浪
雲ちのすそふ来初よ
書重一巻を笑乃中よ
欠落れんそふかつき
外てや屋をねん家乃
外は陽氣のかりて
お当しては花乃父母
又ゆやうき世町へ
らうさらめて舞の八何

外作こころ天の羽衣ひつちく
童坊衣乃をれ西の縁
正筆の縁ふ木言ふして
一同中乃奈乃山風
横飛よ鶴啼也夕暮書
尾花う本まや月とまの
空の月尸さぬるう影落て
賢座を床の衣中乃妻恋
病時ぬ溢まて羨にゆる六
膿よ海よいろはさこまり
ははつこつあはさうあ甲かう
臥菜貝のかこおもひして
志うよよる海去れぬ衣
又抱まう乃縁ぬよひむ

子とつきて指よ傳の猿あう
あうさハと腸と断
あとうに碎くハ破れかこで
水ハ濁まると綿洗のあ
宿屋に舟筒のかけやあん
在るちに徒状とかく
けん切乃を身ハ朝よ原まきと
おをとりまうよんやう傾城
はせん乃あうりくにお縁の
あくのき出さくお門よら
成るあゝの妻なかさのり物胡
こそれ形見え連奇百韻
とわうひ乃おハさめくあめま
備士乃あうる養の志くあ

七日酒残あうして肌をこ
 物尺の柄乃夕暮の光
 ふ妻方なる船二三艘よこの海
 かろくまにひく綱のうけ縄
 太夫の内中えきこもやま芝居
 魁山五乃山旅下ーや
 能生ハ系勸筆乃妻花
 延寶才六午ノ正月

愚筆長三十九句

梅翁

毎句羨麗此亦なれどそ
 僻墨煙入人ともむねな
 翁の罷ゆらさうくぬー

天麦

右百韻付句
伏尺位西岸寺作

朝小白川波梅翁乃百韻
 乃律宿新ハ苗世は道り
 おおきハ名物乃翁たこ
 老人きげもあてつらふ
 吹毛三尺すつらしぬあ
 飛鳥風そよるとわひら
 ひよ心致句あそく免兵法の
 独此病れ白玉盤をけ
 ろこしくりつらもやれや
 句あんと傳りあ入る風
 神百發百中乃矢鹿
 こまやうあらう梅もそ

後山曹子もそ^まごとく
 せぐ^まふき^まる^まる^まる^まる^ま
 ともよ^まら^まる^まる^まる^まる^ま
 け^まは^まあ^まね^まん^ま
 又百句付^ませ^まう^まが^ま何^まと
 出^ませ^まう^ま

着^また^ます^まの^まし^まを^ま飛^まる^ま風^ま
 初^ま松^ま茸^まや^ま昔^ま那^まの^まお^まお^まお^ま
 測^まる^まぬ^まよ^まま^まむ^ま水^ま茶^ま茶^ま茶^ま
 夕^まけ^まる^ま浪^まひ^まや^まる^まの^まら^まれ^まよ^ま

川^まあ^まも^ま一^まつ^まき^まて^ま居^まり^まて
 菊^ま乃^ま初^まさ^まく^ま乃^ま布^ま乃^ま取^ま
 何^ま付^ま乃^ま状^まけ^まて^まあ^まん
 夏^まを^まる^まの^ま馬^ま傍^まの^ま拂^まひ^ま神^まの^ま目^ま
 折^まれ^まの^まう^まれ^まか^まる^まお^ま場^ま相^ま
 左^ま亦^ま同^まく^また^ま乃^まひ^まぎ^まら^ま
 右^ま亦^ま初^まま^まる^ま乃^ま舞^ま川^ま舞^ま
 芥^ま拵^まて^まら^まら^まれ^また^まら^まら^まら^まら^ま
 親^ま乃^まう^まら^まれ^まお^まえ^まん^まを^ま死^まに^まら^まり
 病^ま人^まも^まま^まら^まら^まら^まら^まら^まら^ま
 冬^ま陣^まま^まら^まら^まら^まら^まら^まら^ま
 それ^まに^ま同^ま様^ま乃^まら^まら^まら^まら^まら^まら^ま

一二乃本戸と海ひは乃未
平山や慈岩差して志乃あん
はきいそよふたつ名は五保
又高安乃服ころりあり
寺中あつても神なるもふ
一膳乃法師の母のあれして
法具の地方を以て根元
又人々傳とわむもあはる
身のうはれ程と志乃大報ち
あさい乃お金のうひは信として
隠家とあまはううは思わ
市乃中りくえりは舞よあ
差うさうひい見り野は心
客僧も同じく月も冬入

唐人の衣う川也故つり
肌をさうに足くまはれ中
耳乃垢少く味乃物凡
海斗の紙付は取あ
釜こそそふひやうもたて
あまかまおま乃うさあ冷し
一皮志ころり月乃物湯
はあつて并筒またゆる思
心座いえ志れぬ衣のあは
梅根性も多なるあて
次才よひそむ乃乃常
あまや竹は生ゆは徳物
まぬのよまふつのはは
又二回ともあつてはあり

何
世
かろくハ幼く者乃ハ山の端
取まてく何のい事もい之蓋て
尺もよみ越後乃玉境
それハ厚くも是いりまの
弁まよりくけ上尺杖竿
まきか舟に力と合せり
旗さして大者登る岩の如
放餘鬼乃棚よはつ立あり
本乃丸取乃御用本
かろくやのせりん者る人夫丸
入札ハ山郭公落り
庵あまきよよ立家 徳人
おまかろく乃村取の元
女方や極男にハくはる

月とまら末乃里人袖上声
やれを神とぬくせよ枯風
あはてはかいなつもの
まのりやかこまひもあやんま
ぬり子流るるお程に
決磨とめ石と埃目乃垣
いれしいきかも虫い
仙人乃庭の草木さかんあり
秋乃初の初にふぬいさき
后得立約めんそら月取
後成定家福免うら也
のひけいし京極通り又條点
と聞らていふ百費れいの声
大岩橋りり松もてこい

むう州知町の三母の古き

賣人は借うさうけは柴屋町

犯女さくわにふりまの刺

いささかたすくちもとわさん

今書つられ是こいれ

あ乃まうしちよ袋をきえん

去回一世一交の大酒に

七本松よえもいさぬし

夫婦いさういまい海を

おんていさあのかう取をんや

つきあこの様で書に曰

書乃松枝あ乃むむをれ

くしげとらうよか城因

あわとらうえに何とやいん

このまじりよのめう目とせも

何があくひそ念志あんちや

皆他乃世上の人れゆり

小舟にも山舟あつてえよ

あきくえい候は積月けて

お江戸風よん先年ころ向と

餅さころめからいそり

あうり膳を命もえれ所走六

業平とねえおて花んて

他人推ていりー梅戸

金魚もよま乃あ々るん

柳う湯あわか川もや花袋

一挺乃沖煙の裏流あめり

氷流てや洗ふ耳しあま

乞や遠里小野の乃風
 されども秘苑を致せより
 ちかづくけ代遠ひ乃花
 好ゆふ記録くつを野乃高
 よく回つてみて出撰つて
 輝るる身あふむ世なき
 日影の更く傾く月乃影
 冷くさ地あつ乃あま
 古く執向と汝磨の浦浪
 亦ちあまあつとれ初む
 雲のまきに末影及ふ時
 毛さ思ふれと和教よいや
 半通一まて後乃中あ
 徳式もこの世をよとれ

欠落ぬそは葛城高るふ
 此初ハくくもあ
 又てや加ちんおなれや分
 尖をこの小者あすハ一松枝
 夕へは陽光のついで
 長よまてくやとく餅米
 劫當しては花の父母より
 去筆の冬も身は体は付くは
 又ゆやうき世町と形胡蝶
 羨と終てや付さう乃影
 傍療がて舞乃あや
 文らねよた報うさう後ハ
 わさうたのね衣は川ち久
 ともこの大小なやわり

童坊衣乃やれがよひ初
 来違ハ能ハ孫母や相阿弥也
 正等の法ハ材ちよして
 形乃自悟をれ最士の杯
 一間半乃座の心凡
 名匠つるふひえちむえ射籠
 横飛に鶴鳴さり久乃巻
 秋さり衣戸くくつちる者へ
 尾花う平に如川とまいつる
 野うけおもろ鞠庵下まごし
 丸の月やふるゆく影落て
 手を继のしほと色う猿智魚
 骨月並と麻の紐まれ妻恋
 すま秋のうら栞の中よりくと

病時ぬ溢きて後ゆる心ハ
 中心道成衣通一乃秋
 うみとまのいふはけいりり
 枚針もあつそひひそらうくとせ
 肉うらうらつちねとちる中じし
 ちさけいこそ熱柿くらけよ
 目菜貝乃片ちひして
 心中もまの珠のこく丸りきや
 志もよまの鶴の海士のおま衣
 袖まなもこ乃けりくうふ親子
 又おまうれえねよひ髪
 秋はすうらまをそくく月下此の
 子をききて栞を侍小様あ
 田今わうくへああひひ為禱

おうさくくく勝と出
とるまづ下ひえは是秋乃天
かるとに碎らるる風しに
又湖乃隠者もわらふべしぬ
ふら濁まきり猶洗ふ下
とらわらう仕合と約夕時分
右邊に舟岡の橋や前ん
捨垣乃以後ハ白川乃名
左原ちに橋状をく
奈の相と一勝なりり也
移舎りん身朝中障あき
屋の文はとそらへくそるる
我とありらば生やり傾城
寵妃ハ身にあり三子也

志やせん衆ちうたはよお依の
駒とともやめて後戦のそと
あくれぬき西門はあ川
新町にゆえとくあう天五寺
此爰悲れ事なむのそ朝調
うはらうとらや紅梅れく
忌取見乃連前の子韻
天祚とと心あさあや州ん
とあひのあさあさみる
ともよあはれむ物志れあや
備士のまゝら暮れあ
舟よりよ誇りしとれ半とさ
今日ハ酒錢あてて肌産
産くくんとらまこけて丸寝よ

物見乃松の夕暮の空
暮をさへかに嵐の吹くこと
不意ちうち二三艘より海
文珠文利ややはえんねらふ
くらくらにひく綱のうけ縄
あえのすまの程ももさん
太夫の内をさうとめやはん
けは文領とてあけこり
是山王乃山旅而や
唐海女あり豆腐の産り
誕生ハ系勅年れ雲の花
东风乃そふく大膳乃亮
延寶才六年ノ三月
水引や懐紙のとりあむむん

戊午二月中旬

老比丘任口書

寺町三條上
井筒屋庄兵衛板

